

# 聖農 石川 理紀之助

【1845～1915】

石川理紀之助は明治期の農業指導者。「聖農」と称され全国に知られています。生涯を農業指導・農村救済に捧げ、今日の秋田県の農業の基礎を築きました。

出羽国秋田郡小泉村（現秋田市金足小泉）に生まれ学問好きな祖父の影響で幼少時から勉強に励み、生涯で1万冊の本を読破したといひます。

21歳、山田村（現潟上市昭和豊川山田）の地主・石川家の婿養子になり、逼迫していた石川家の家計を立て直します。同時に村全体の復興も図り、「農業研究会」を組織しました。

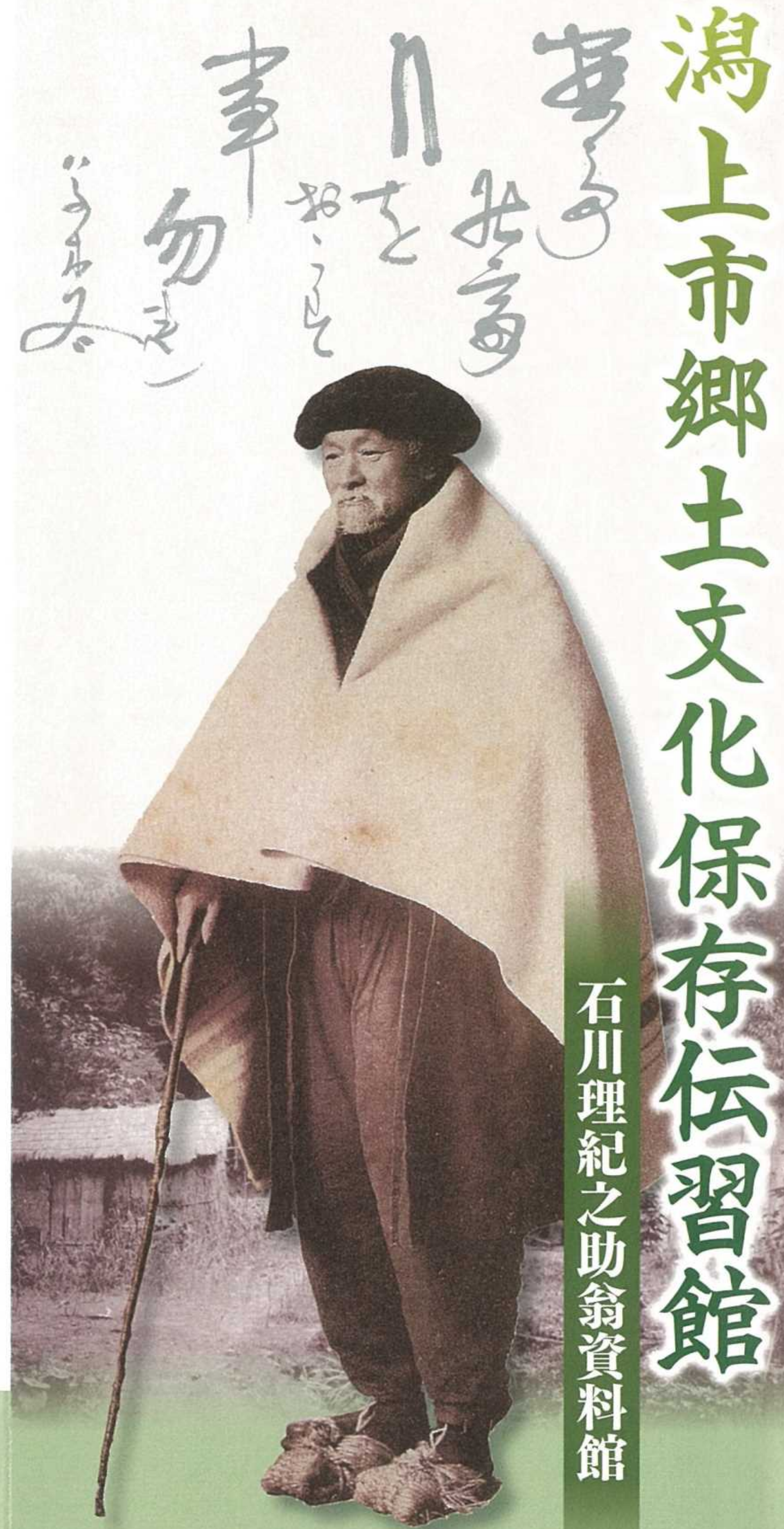
その後、秋田県庁で農政に従事。34歳のとき、農民らが技術情報や種苗を交換し合う「種子交換会」を開催。140年以上たった現在も続く「秋田県種苗交換会」の起源となります。また、「歴観農話連」を結成し、農業の賢人である「老農」を招き勉強会を開催しました。

39歳で県庁を退職。再び山田村に戻り「山田経済会」を設立します。村の借金を5年で返済した実績は政府にまで知れわたり、農商務省で成果を報告しました。

山田経済会に対する一部からの批判を受け、草木谷に粗末な小屋を建て自給自足の生活を送ります。地主への借金を3年で返済するなどの成果を上げ、自身の誠意と方法論の正しさを世に示しました。

52歳、各地の土地を調査し適地適産を進める「適産調」に取りかかります。7年にわたって秋田・福島等の2県8郡49町村を調査し、731冊の調査書をまとめました。

晩年も農村救済の活動を続け、58歳で同志7名と宮崎県で、68歳では仙北郡強首村九升田（現大仙市）で事業にあたります。老体となっても農村復興に力を注ぐ姿は、農民たちの心を大いに動かしました。県内での事業の途中、71歳で永眠しました。



晩年における翁の外出着姿。頭巾、白毛布、ワラ靴など、その風貌には、いずれも翁の人柄を偲ばせます。



開館時間	4月1日～10月31日	9:00～16:30
	11月1日～3月31日	9:00～16:00

休館日	月曜日（祝日と重なった場合翌日）
	年末年始（12月29日～1月3日） 国民の祝日の翌日

入館料	区分	個人	団体
	一般	270円	220円
大学・高校生	160円	110円	
小・中学生	110円	80円	

※団体は20人以上の場合に限る

使用料	区分	4月1日～10月31日	11月1日～3月31日
	研究室（和室）	1時間：880円	1時間：1,100円
学習室	全面：990円	全面：1,430円	
	半面：550円	半面：880円	

- 交通案内
- ◆ JR 大久保駅より 約2.5km
  - ◆ マイタウンバス豊川線山田入口下車 徒歩で約15分
  - ◆ マイタウンバス大久保駅前下車 徒歩で約30分
  - ◆ 「道の駅しょうわ」から 車で 約5分



**潟上市郷土文化保存伝習館**  
〒018-1416 秋田県潟上市昭和豊川山田字家の上64  
TEL 018-877-6919

## 石川理紀之助翁の生涯

### 石川理紀之助翁略年譜

西暦	年号	年齢	事項
1845	弘化 2	1	誕生 出羽国秋田郡小泉村 父・奈良周喜治（三男）
1853	嘉永 6	9	手習師匠に就いて習字を学ぶ
1865	慶応 1	21	山田村石川長十郎の婿養子となる
1867		23	山田村農業研究会を設立する
1869	明治 2	25	山田村肝煎後見役となる
1872		28	秋田県租税課に出仕する
1877		33	内国勸業博覧会へ用務をおびて上京 途中各県の農業視察 勸業義会第一支会をつくる
1878		34	腐米改良事業に取り組む 種子交換会をはじめる
1880		36	歴観農話連を組織し会頭となる
1883		39	官職を辞して農家経済の道を教える為に村に帰る
1885		41	山田経済会を組織し救済事業をはじめる
1887		43	長男民之助家出 訪ねて千島にわたり遺骨を持ち帰る
1888		44	農商務省で山田経済会の実績について講話を行う「経済のことば14ヶ条」を発表
1889		45	山田村救済第一期の目標完遂 草木谷に山居する
1894		50	第1回全国農事大会に出席 有功章を授与される 北白川宮殿下の命により九州各県を巡講
1895		51	農会を設立し郡農会長・県農会長となる 四国、九州各県・千葉県を巡講
1896		52	適産調をはじめる
1902		58	同志7名とともに宮崎県に行き前田正名（元農商務次官）の事業に協力して宮崎県北諸郡山田村谷頭の指導にあたる この年適産調終了（2県8郡49町村）
1903		59	あとつぎ老之助（おいのすけ）病死
1912	大正 1	68	乾田適地調査を行う 強首（こわくび）村九升田の救済に着手する
1913	大正 2	69	宮城県巡講 秋には青森地方の凶作地視察巡講
1914		70	角間川町木内（きうち）・布晒（ぬのざらし）地区の指導にとりかかる 夫人スワ病死
1915		71	強首村九升田指導第一期完了 9月8日「尚庵」において永眠

〔翁生家（奈良家）〕  
翁は弘化2年2月25日、旧家にして代々堅実な篤農家を出している豪農奈良家の分家に生まれた。



# 石川理紀之助翁の生活、思想を伝える

潟上市郷土文化保存伝習館（石川理紀之助翁資料館）は、県指定史跡に指定された石川理紀之助遺跡に建てられています。郷土文化保存伝習館には、石川翁の膨大な数の遺著、遺稿、収集物、諸資料などを中心に保存、展示しています。遺跡地にあるそれぞれの建物には、翁ゆかりの遺品などが保存されており、翁の生活、思想をそのままに伝えています。

## 第1展示室

石川翁の青少年時代から晩年までを年代順に解説した展示です。種苗交換会、草木谷での暮らし、適産調、宮崎での農村指導などを常設した展示室です。



▲備荒米と救荒食物図解



▲石川翁の手形



▲適産調



▲豊川村適産調  
▲経済のこぼし掛け軸



▲種苗交換会沿革史

## 県指定史跡

# 石川理紀之助翁の遺跡

農村の更正、農民の救済、農業の発展に尽くし、種苗交換会を創設した翁の遺跡は、晩年の住居であった尚庵を中心に備荒倉、梅廻舎、三井文庫、石川会館、また東1.8kmの山間に翁の山居跡「五時庵」などがあります。



**茶畠文庫**  
翁が66歳のとき、産米検査員養成のために使った建物を移し、雑誌、年報類を収蔵しました。



**尚庵**  
晩年をすごした庵。自分が農民であることを忘れず、それに応じた生活をしたことがうかがわれます。



**婿養子当時の石川家**  
慶応元年21歳の時、隣村豊川山田の旧家石川家の養子になり石川家をつぎました。

茶畠文庫

尚庵

石川家

梅廻舎

備荒倉

古人堂文庫  
遺書文庫

三井文庫

石川会館

石川家墓所



**三井文庫**  
翁の読破した書籍一万巻や日記、歌稿、適産調や吉凶屏風、探針、旅行用具等の遺稿、遺品を保存していました。



**石川会館**  
大正9年に同志によって「石川会」が組織され、その道場として大正11年に建設された。青少年の講習会・夜学会に使用されました。



潟上市郷土文化保存伝習館  
【石川翁資料館】

草木谷「五時庵」

貯水池

石川神社



草木谷の山居（五時庵）

10年間の農貧生活を送った山居。明治31年に焼失しますが、弟子たちが駆けつけて5時間で再建し、五時庵ともいわれています。



梅廻舎

翁が59歳の時、後継者老之助が病死。父を失った孫を育てるために建てたものです。



古人堂文庫・遺書文庫

明治31年の火災で多くの書類を失ったことに鑑み、古人の書を火災から守り、子孫に伝えるために建てたものです。

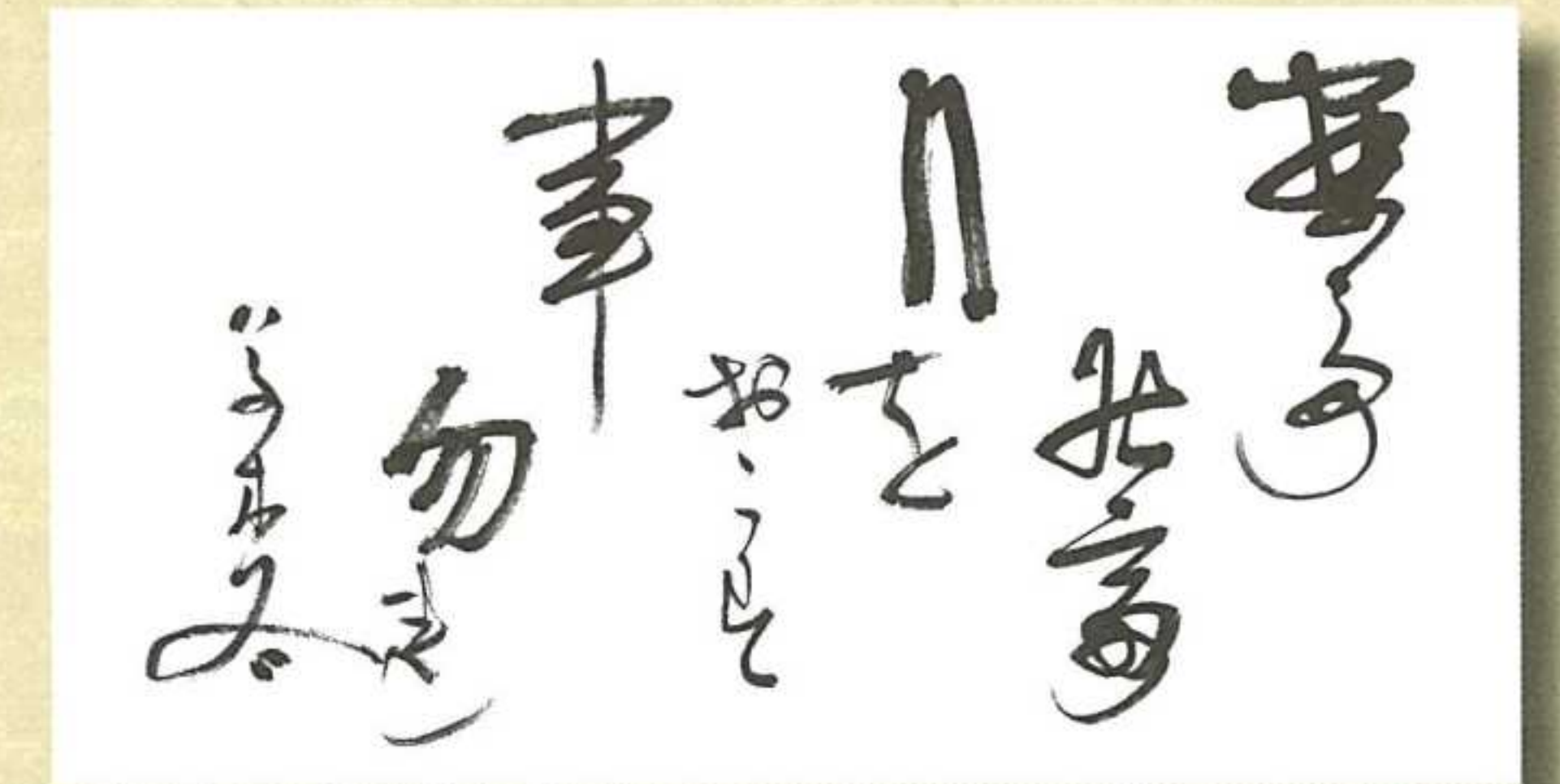


石川家墓所

石川翁、翁夫人、民之助、老之助及び太郎氏の墓がある。翁の墓石の文字は翁の直筆です。

## 寝て居て人をおこす事勿れ (石川翁筆)

自ら早起きをし、率先して働くという意。石川翁が生涯の信条とした言葉。



## 板木

村人に、早起き朝仕事を促すため、吹雪の朝も、元旦の朝も、午前3時に板木を叩き、その後、一軒一軒を回り、村人たちを励ました。



## 世にはまだ生まれぬ人の耳にまで響くはこれのかけ板の音

石川翁は、500里離れた人々や500年後に生きる人々にも聞こえるように、かけ板（板木）を打っていたと伝えられています。



## 第2展示室

郷土の歴史、民俗、美術、産業等の特別展示室で「和歌」と「宮崎行きにも同行した“7人の同志”」をテーマに定期的に展示を入れ替えています。

